

このページでは、「いっしょに！ OSAKINI プロジェクト」と題して、2021年4月に設立された大崎町SDGs推進協議会

(参画団体：大崎町、鹿児島相互信用金庫、株式会社そののまち、株式会社南日本放送、合作株式会社) の活動をご紹介します。

いっしょに

OSAKINI PROJECT

VOL. 03

みなさん、こんにちは！ 9月といえばやっぱり十五夜、お月見ですね。たまにはゆっくりと空を見上げて、キレイな月を眺めて見るのも良いですね。私はどちらかというとお団子のことに思いを馳せてしまいますが……。さて今月は、大崎町のリサイクルについて紐解きます。ゲストは、ごみに関わる仕組みづくりを長年牽引してこられた、徳禮勝矢(とくれい かつや) さんです。

徳禮勝矢さん：

大崎町出身。土木技師として大崎町役場に入庁。現建設課を経て保健福祉課の初代環境係長に異動し、6年間在籍。その後、農林振興課長、企画調整課長、建設課長を経て定年退職。コロナ禍の影響で、いろいろな活動を停止中(ステイホーム)。



## なぜ細かく分別するの？

埋立処分場は、もともと1990年から2004年まで使用できる予定でした。けれどごみの量は増え続け、1998年には「2004年までもたない」と言われ始めました。それまでは生ごみも空きカンも空きビンも、全部一緒に黒い袋に入れてごみ出しが実施されていたので、埋立処分場には、カラスやハエが飛び回っている状態。このままだと埋立処分場がいっぱいになって、住民のごみの行く先がなくなってしまいます。そこで、持ち込むごみを減らして埋立処分場を長く使えるように、細かい分別をして、ごみの資源化・減量化を図ることにしたんです。とは言っても、当時の住民の方々には分別する習慣がほとんどない。だからまず、住民代表の組織である衛生自治会の方々に、埋立処分場の現状を見ていただきました。埋立処分場の延命化を目的に、埋立ごみの量の減量化を一刻も早く解決する手段として「**分ければ資源・混ぜればごみ**」をスローガンに、行政と協力して資源化を進めることで、衛生自治会の賛同を得ました。実際に分別の手間が増えるのは、住民ですから。でも、埋め立てたり燃やしたりするより、分別すれば埋立処分場のごみが減って新しい施設は不要になることや、環境にやさしい持続可能なごみ処理方法を説明したら、自らがごみ排出者である住民の役割を理解して、協力してくれました。

中垣る(なかがきる)  
事務局 広報/PR担当  
所属: 合作株式会社



埋立処分場

## 当時の2つの選択肢

### 1つ目 焼却炉を新しく建てる

燃やした後に出る灰は、埋立処分場に運ばなければならないため、結局新しい埋立処分場が必要。焼却炉を新設するとなると場所の選定や、周辺住民の建設同意に時間がかかり、整備時期が確定できないことが課題。その上、焼却炉を運用・維持するためのコストがかかり、子どもや孫たちの世代にまで、負担をかける。

今の分別の仕組みは、行政が決めて住民に指示を出して進めたわけではありません。埋立処分場を長く使うためという目的は伝えますが、その目的のために本当に分別をするかどうか決めるのは、住民の代表組織である、衛生自治会です。これが、他の自治体とは大きく違うところです。



### 2つ目 新しい埋立処分場を設ける

悪臭がしたり、カラスや虫が集まったり、誰も自分の家の近くに建設して欲しくない、迷惑施設というイメージが強い。ごみは出続けるため、いずれまたいっぱいになり、新しい埋立処分場を建設する必要があるため、候補地の周辺住民の同意など同じ議論を繰り返す。

### 3つ目の

### 新しい選択肢

今ある埋立処分場を

長く使おう！

